



### 「とっておきのお話」

#### 1 ミッシングピース=人は欠けたところがあるから向上できる！

お腹が満腹のときは、何も食べたいと思いません。しかし、空腹のときは、あれが食べたい、これが食べたいと食欲が湧いてきたり、献立のアイデアが出てきたり、スーパーで何を買おうと考えたりとやりたいことやアイデアが生まれます。そのようなときは楽しいものです。

喪失感というマイナスのイメージが強いが、その欠けたところから、次の楽しみを見付けるエネルギーがたくさん湧いてきます。



#### 2 「鬼は外、福は内」は魔法の言葉



友達とうまく関われない3歳児のM君。M君が友達とお店屋さんごっこをしている場面に、鬼の面を付けた二人の男の子がやってきました。遊びを邪魔されたくないM君は、二人を追い払うために力いっぱい押しした瞬間、一人の男の子が倒れてしまいました。幸いにケガはしませんでした。数分後、また同じような場面。

そのとき、そばにいた保育士がM君にある言葉を耳打ちしました。すると、先ほど力任せに押ししていたM君、今度は「鬼は外、福は内」と、言葉で二人の男の子を追い払いました。

M君は腕力よりも、言葉で伝えた方が効果があることを学びました。たまたまうまくいったかもしれませんが、偶然を重ねることで必然になり、やがて当たり前になります。

#### 3 一流アスリートの考え方

松井秀喜選手が不振に陥り、アメリカのメディアに叩かれたとき、ある記者の「気にならないか」の質問に、「気になりません。記者が書くことは僕にはコントロールできません。コントロールできないことには関心を持ちません」と答えました。

イチロー選手が他の打者と激しい打率争いをしているときに、相手の打率が気にならないかという質問に、「愚問ですね。他の打者の成績は僕には制御できない。だから意識することはありません」と答えました。

他者の考えや起こった出来事は変えられないが、自分の考えや起こった出来事の意味は変えられます。明日の自分が過去の自分を変えていくのです。松井選手とイチロー選手は、変えられないものは放っておいて、変えられるものに注目したのです。他者が変わるのを待つのではなく、私たち自身が最初の一步を踏み出すのです。

#### 4 これぞプロの技

小児科の名医といわれている先生は、いつも白衣のポケットに手を入れながら子どもを診ていたので、不思議に思った人が、「なぜ先生はいつもポケットに手を入れているのですか？」と聞くと、優しい表情を浮かべながら、「小さいお子さんを冷たい手で触ると、それだけでびっくりして不安になるからです」と答えました。

あるお寿司屋さんで、70歳くらいの年配の母親と40歳くらいの娘が同じお寿司を頼んでいました。母親が「今日のお寿司は食べやすいね」と言ったので、娘が何気なくカウンターを覗いたら、大将が何も言わずに母親の方だけ、食べやすいように「隠し包丁」を入れて半分にしていました。

どの子どもにも必要な指導と、一人一人の子どもに合わせた指導が大切となります。

## 5 ディズニーに学ぶ



ディズニーランドには、特別な割引制度はありませんが、ゲストアシスタントカードを利用すると、いろいろなサービスが受けられます。例えば、指定された時間に行けば優先的にアトラクションを楽しめたり、大きな音が苦手な場合はスピーカーから遠い座席に案内してくれたりするサービスがあります。しかし、ディズニーランドの素晴らしさは、サービスを越えたおもてなしです。

白い杖を持っている目の不自由な人がいると、キャラクターたちは、自分の顔を触らせ、視覚以外の感覚で認識し、触れ合いを楽しめるようにします。レストランでは、スタッフがさりげなく点字メニューを差し出したり、食器を取りやすい位置に置いたりします。また、あるお客様が花壇に咲いている花の名前を質問すると、「花火が始まる時間までに調べさせていただきます」と、丁寧に対応して期待を裏切りません。しかも、スタッフがチームで動き、花の名前だけでなく、花言葉まで調べ上げます。

「お客様の声は成長できるチャンスをもたらしているのと同じ！」このようなマニュアルを超えたおもてなしが、人の心を動かし、「また、ディズニーランドに行きたい！」という気持ちにさせてくれています。

## 6 人は知識だけでは動かない

電車で座っている際、お年寄りが乗ってきたとき

- 1 席を譲らないといけないと考えて席を譲る
- 2 お年寄りが立っているのは辛いだろうと相手の気持ちを考えて席を譲る
- 3 周囲の目が気になって席を譲れなくて「悪いことをしてしまった」と罪悪感を感じる
- 4 全く何も感じない



思いやりのある人は2ですが、3も同じくらい思いやりがあるといえます。席を譲らなければならないという知識はみんなもっています。しかし、知識だけで人は動きません。誰かから「思いやられた」という経験が必要です。

友達におもちゃを貸せる子どもにするためには、子ども自身が貸してあげたいと思える経験をしなければ行動に結び付きません。知識ではなく相手の情動を感じて行動できる子どもを育てたいものです。

## 7 バasketボールの審判と授業づくり



バスケットボールでは、先にプレイを先回りして待ち受けているリード審判と、プレイの集団の後ろから追いかけて行くトレイル審判の二人がいます。ハーフコートで6分割し、攻撃と防御が入れ替わる度に、審判の役割も入れ替わります。「ボールのないところ」のプレイが勝敗を決めることもあるため、審判は試合前にお互いの役割と責任範囲を確認します。そして、多くの時間をかけるのは、両チームの特徴を細かく分析して試合のプランを立てることです。このプランがあれば、的確なホイッスルでプレイが進み、選手はもてる力を発揮できます。

これは授業づくりと似ています。子どもの実態把握を的確に行い、指導案を作成して子どもの目標や教師の役割を確認し、授業では目の前の子どものわずかな表情や言動の変化を感じ取り、軌道修正を加えながら進めていくことで、子どもの力を引き出すことができます。



かづの校副校長 加賀谷 勝

